男女共同参画社会をめざす情報誌

パートナー

PARTNER

2008.10.15 発行 No. 30

主な内容

●市長は参画、それともマル？
●知ってる？「パパ検」
●誰でも作れる簡単レシピ
●母親の視点で考えられた防災グッズ
●はだの市民が創る
男女共同社会推進会議からのお知らせ
●女性相談室のご案内

発行 はだの市民が創る男女共同社会推進会議

事務局 秦野市役所くらし安心部市民自治振興課市民活動支援班
秦野市桜町 1-3-2　TEL.0463-82-5118　FAX.0463-82-6793

E-mail siminjiti@city.hadano.kanagawa.jp

市長は参画、それともマル？

午後8時、遅めの買い物をしていると、奥様と仲むつまじく、買い物をしている古谷義幸市長の姿をお見かけすることがある。そんなパートナーのイメージにピッタリな古谷市長にリニューアル特集号にご登場いただくべく、「ようこそ市長の部屋へ」をお訪ねした。すると、我々の興味は、ますます膨らみ、図々しくも、ベストパートナーである奥様との懇談までも申し込んでしまった。

私たちの活動が始まった平成5年。「男女共同参画社会の実現」といっても、この社会には男と女しかいないのだから簡単なものだと考えていた。しかし実際に活動してみると、とても奥が深く、終わりのない活動であることを痛感している。そこで、まずは市長が持つ「男女共同」に対するイメージから質問を始めてみた。

◆「男女共同」にどういうイメージを持つか

「男女共同」とともに「男女差別」「男女同権」という言葉があるが、これらの言葉が全てを表しているように思う。単に経済的な問題だけでなく、心の問題もある。男女共同とは、「男女差別」と「男女同権」という壁を乗り越えなければならない。

◆家庭の中での市長はどうか

あなたは、「布団を自分で敷きますか」、「茶碗を自分で洗いますか」、「料理はしますか」。私はやっています。しかし、炊事は片づけが大変だからやめてほしいと言われてしまう。

家庭では男女ということではなく、それぞれができること、特性を活かして仕事をしていくことだと思う。

ここまでは、「市長なかなかやるな！」という印象。今度は、市長の人柄を知るべく、質問の方向を変えてみた。

◆政治家を目指したきっかけは

昭和45年に総理府の青年海外派遣団の一員として南西アジア、インド・ネパールを見て回る機会をもらった。そこで見た内乱などで、最初に被害を受けるのは子どもや女性だった。平和の大切さ、政治の安定といったことを体で感じた。そして市議会議員に立候補し当選。次に県会議員、そして市長へと進んだ。一見、順風満帆に見えるが苦労の時代もあった。

◆市長を目指したきっかけは

県会議員になったことで、外から秦野を見ることができた。そして自分の政治生活の集大成として市長を務め、夢を実現したいと考えた。従来の枠にとらわれず、市民に喜んでもらえるサービスを増やしたい。

◆公的なことを奥さんに相談するか

市長としての仕事は、市の職員に助けてもらっているが、今、市長としてあるのは半分以上、女房の力であると思っている。戦友みたいなものですね。

◆奥さんをファーストレディとしたらどうか

これまでも今も、会社のこと、家のこと、事務所のことなど、いろいろと女房に支えてもらっている。これ以上の負担はかけられない。

♣市長との懇談を終えて

市長の家庭の生活スタイルは、自然に生まれたものであり、それぞれの自立を想像させるものだった。

そして、自分の考え、信条、政策など多岐に渡り、熱くパワフルに語る市長は、私たち市民が信頼できる良きパートナーであると感じた。

後日、市長の発言を検証すべく、奥様に編集会議の場にお越しいただいた。さて、その結果は…。

♥公的なことを相談するかという質問に対して

ずっと共働きでやってきた中で、家庭に仕事は持ち帰らないし、家でグチっても問題は解決しないため、お互いに家では仕事のことは話さない。しかし、選挙のことは別。選挙では、間違いなく戦友ですね。

♥ファーストレディとしての活躍が望まれることに対して

夫が市長に就任してからの2年半の間で、奥さん出てくださいという場面はありませんし、市長という公的な場でのパートナーは市役所の方々で、家庭や政治家としての古谷のパートナーが自分の役割だと思っている。

笑顔で、そしてハッキリとした言葉でお話になる奥様の姿は、まさに自立した女性そのもの。

では、家庭はどうだろうか。

♥家庭の中での市長について（家事・子育てへの理解）

私が教員をしていたため、夫だけでなく、皆に助けてもらわなければ子育てはできなかった。

基本的に、古谷は台所に立つことや買い物に行くことは好きですね。でも一緒に行くと余計なものをいっぱい買うことになってしまう。

また、洗濯には私自身のこだわりがあるので、自分でやりたいし、やってもらいたくはないですね。

男とか女とか関係なく、人と人としてお互いに助け合っているという印象を受けた。

仕事をする人間として向き合ってもらったと感じている。もう30年以上前になるが、結婚したときには、なぜ女房を働かせておくんだという先輩議員もいたようだが、仕事をやめろということは一言も言わなかった。

私がどのような思いで教員になったかを知っているので、「精一杯やればいい。その上で助けるところは助けるし、僕も助けてもらうところはある」と言ってくれた。

市長のご家庭では、「俺が食わせてやっている」という発想はないのですね。

♣お二人をとおして

いろいろな状況の中で、家族の一員として、今、自分が何をすべきかを判断し、役割をこなしている姿を連想させられた。これは、それぞれが精神的に自立しているからできることであり、自立こそ、男女共同参画社会の根本だと考えさせられた。

「男女共同参画社会の実現に向けて、できることをコツコツやっていく。なかなか理想どおりにはいかないが、世の中の意識が変わって少しずつ理想に近づいてくる。」という夫人の言葉が身にしみた。

なぜ 女性たちは仕事を続けることができないのか！

女性の社会進出が進んだとはいえ、結婚や子育てを理由に退職する女性は少なくない。なぜやめてしまうのか。

世間では、労働人口減少到来の波を受け、ワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）が叫ばれている。

ワーク・ライフ・バランスは、これまでの働き方を見直し、仕事の効率化を求めるとともに、女性の活躍を期待するものだ。

まずは、一歩を踏み出してみよう！

ウィンドウズ95がマイクロソフトから発売されてから満10年になる。パソコンが職場に普及したタイミングで寿退社をして、子育てをしてきたお母さんたちは、いま社会復帰の時期に来ている。

しかし、女性たちの状況は、「パソコンについて行けるかしら…」「両立できるかしら…」などなど、復帰を躊躇する人も少なくないのではないだろうか。

とはいえ、仕事を熟知し、様々な知識を持っている人たち。

PTA や地域活動への参加をはじめ、母親の視点を獲得することで視野が広がっているはずだし、子育て経験が職場の人材育成にも活かせるのでは?

社会のルールを変えなくては厳しい面もあるだろうが、ぜひもう一花、咲かせてほしい。社会は動いている、まずは一歩を踏み出してみよう。